

TOPICS

2012. 9. 27

「日本肺循環学会」が発足

肺高血圧症をはじめ肺循環疾患の研究・診療を推進

大滝隆行

「日本肺循環学会」が設立され、第1回の学術集会が9月22日に都内で開かれた。同学会理事長で学術集会の会長を務めた下川宏明氏（東北大学大学院医学研究科循環器内科学教授）は同日に記者会見し、「肺高血圧症をはじめとする肺循環疾患は複数の分野にまたがる疾患であり、この疾患を難病から治療・治癒可能な疾患にすべく、研究者が一堂に会して意見交換をしたり前向き研究などを行う学術組織が必要だった」と語った。

これまでわが国では、肺動脈性肺高血圧症や肺血栓塞栓症などの肺循環疾患は循環器系、呼吸器系、リウマチ系などの学会学術集会の一セッションとして取り上げられることはあったが、この疾患をメインに取り上げて全国から分野横断的に研究者が集まる学術組織はなかった。

同学会の組織は、内科系・外科系・小児科系・病理・薬理・看護学など多分野にまたがる24人の理事、65人の評議員で構成される。「肺循環疾患の患者さんは長い闘病生活を強いられるため、看護の分野が非常に重要。理事や評議員に看護学の専門家や看護師も入ってもらった」（下川氏）という。

特に同学会が力を入れたいと考えているのが、肺高血圧症のレジストリー研究だ。現在、海外では米国の3000例弱の患者を対象としたものを筆頭に、フランス、スペイン、中国、オセアニアでそれぞれ数百例単位の肺高血圧症レジストリー研究が走っている。一方わが国では、いくつかの専門施設が肺高血圧症の症例を集積しているにすぎない。「今後、日本でも研究者の力を結集して海外に負けないようなレジストリー研究がしたい」と下川氏は意気込む。

また日本では、肺高血圧症などの治療を行う専門施設がまだまだ少なく、多くの患者が長い距離を移動して通院しているのが現状だ。そこで同学会では、全国の専門医に肺循環疾患に関する情報を発信して、都道府県単位での治療施設の充実を図るなど治療機会の均



日本肺循環学会理事長の下川宏明氏

てん化を後押ししたいとしている。

第1回学術集会は「日本における肺循環診療・研究の集学的スタート」をメインテーマにして開かれ、約350人の参加者を集めた。「予想の倍を上回る参加人数で、それだけ先生方が肺循環疾患に対する勉強の機会や意見交換の場を必要とされているのではないか。今後も徐々に学会を充実させていきたい」と下川氏は話している。

次回の学術集会（会長：三重大学大学院医学系研究科循環器・腎臓内科学教授の伊藤正明氏）は、2013年6月22～23日に東京ステーションコンファレンス（東京都千代田区）で開催される予定だ。

日経BP社

© 2006-2012 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

転載許可取得済

日本肺循環学会が第1回学術集会を開催

肺動脈圧が持続的に高値を示す肺高血圧症(PH)などの肺循環疾患を主題とした日本肺循環学会の第1回学術集会が、このほど東京都で開催された。学術集会の初代会長を務めた東北大学大学院循環器内科学の下川宏明教授(同学会理事長)は、記者会見で「患者本位の医療体制を構築し、わが国の学術的な情報を世界へ発信したい」と決意を表明した。

肺循環疾患を取り巻く 国内外の歴史

肺循環疾患については、これまでに4回の国際シンポジウムが開かれ、肺動脈性肺高血圧症(PAH)の概念が提唱されるなどした。わが国では、

1975年に旧厚生省の調査研究班による活動を足がかりに、難治性疾患のPAHや慢性血栓塞栓性肺高血圧症(CTEPH)が公費対象となった。しかし、国内には研究者が定期的に研さんを積みながら情報を交換し合う場がなかったため、同学会が設立されることとなった。

下川教授は「学会設立は研究者にも患者にもメリットがある。国内研究の発展と治療機会の全国的な均てん化、そしてわが国で結集した学術情報を世界に発信したい」と話した。

第2回学術集会は2013年6月22～23日に、東京都の東京ステーションコンファレンスで開催される。